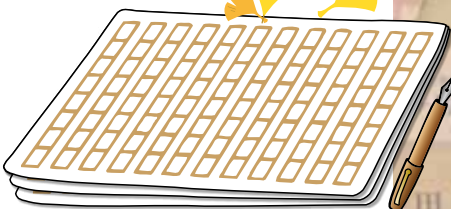


ちょっと気になる八王子マガジン

は ち と ぴ



2018年 清風号

No.40

Take Free

〈ご自由にお持ちください〉

特集

橋本義夫と八王子



ふだん記グループが発行した本と橋本義夫（宮川孝之氏撮影）

橋本義夫の足跡を追って

雲のようにしなやかに

だれもが文章を書ける社会に向けて

橋本義夫のふだん記運動

石に刻まれた先人の記憶

橋本義夫の建碑活動

元気印の市民団体紹介

コラム 八王子の民俗誌⑥

コラム 八王子の原風景⑥

私の本はこうして生まれた 其の四十

NPO 法人かたつむり

八王子のまちの起源伝承——牛頭天王の祭り 佐藤 広

兵衛川——宇津貫六谷戸 馬場喜信

『中央本線419列車——いのはなトンネル列車銃撃空襲の悲劇』



◀ 在りし日の橋本義夫

橋本義夫の足跡を追って

「はちとび」を発行しているのは印刷会社清水工場の出版部門・揺籃社ようらんですが、「揺籃」ということばは、スイスの教育者ペスタロッチの至言「揺籃を動かすものは世界も動かす」に由来しています。かつて市内にはこのことばを掲げた風変わりな書店「揺籃社」が営業していました。店主は20世紀に市内で数々の社会運動を起こした橋本義夫。彼は八王子に何を残してきたのか、その足跡を追ってみます。

雲のように しなやかに



「教育の家」運動

橋本義夫は1902年（明治35年）3月13日、南多摩郡川口村榑原（現八王子市榑原町）に南多摩郡郡会議員の父喜市、母春子の次男として生まれました。厳格な父と比べて、弱い立場の人にも分け隔てなく優しく接する母の姿を見ながら育ちました。

犬目の陶鎔小学校、川口小学校高等科を卒業したのち、15歳で青梅の府立農林学校に入学し、寄宿舎生活を送りま

す。このころから白樺派や内村鑑三らの思想に傾倒していきますが、一方で吃音の症状に悩まされるようになりました。

卒業後は実家に戻り、村の青年たちと「教育の家」運動を起こし、近くにある念西庵という小さな庵寺で日曜学校を開催します。良書を読ませたり、青年たちに文を書かせる回覧誌『自然人』や『揺籃』を発行していました。

また、生活改善・悪習打破を訴えた運動も行っていました。



▲府立農林学校時代（前列右から3人目が橋本）

す。特に排酒運動は全国版の新聞にも取り上げられ、各地で同様の活動をしている青年たちとも交流するようになりました。

やがて橋本たちは、村を出て八王子市で書店を始める決意をします。1928年（昭和3年）、横山町2丁目の、甲州街道沿いにある2階建ての借家に、わずか数十冊の本を並べた小さな書店、揺籃社を開店させました。



地域の文化拠点・揺籃社

時あたかも大正デモクラシーだったただなか。揺籃社に集まった青年たちは、2階で歌をうたったり、オルガンを弾いたり、自由な雰囲気を謳歌していたようです。

1931年には横山町3丁目に店舗を移転。学術書も多く発行していた岩波書店の本を多く揃えていたことが特徴的で、売れる本よりも良い本を並べたいという思いが書棚に表れていました。次第に揺

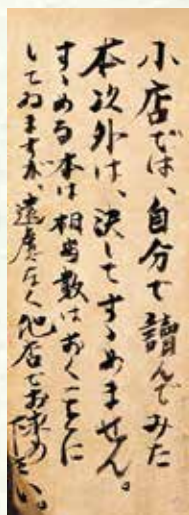


◀ 『自然人』3号

籃社には良書があるという評判が広がり、客足も増えていきました。

当時の八王子近辺では、たとえば『大菩薩峠』で知られる中里介山が開いた浅川村の「隣人学園」、恩方村には松井翠次郎や菱山榮一ら青年団が中心になった教育文化運動、八王子市では市川英作らの「薫心会」など、各所で文化運動が活発に行われていました。「たまり」とも呼ばれる、こうした文化運動の活動家らが交流する地域の文化センターとしての役割も、揺籃社は担うようになります。

多摩少年院院長の太田秀穂



▶開店初年の揺籃社と貼り紙

や元八王子小学校校長の平井鉄太郎など、橋本の活動に理解を示す知識人も常連として店をよく訪れていました。薫心会に参加し、市川英作らとともに多摩勤労中学（現八王子学園八王子中学校・高等学校）創立に尽力した南町の歯科医、須田松兵衛などは、20年もの間、ほぼ毎日揺籃社に通いつめる熱心な顧客（友人）だったといえます。

教育科学研究会

1937年、橋本は松井翠次郎のまとめた横山村館の農



▶揺籃社の初期の包み紙

村生活の実態調査を雑誌『教育』に送ります。これをきっかけに、『教育』を編集していた教育科学研究会（教科研）の幹部であつた教育学者の城戸幡太郎や留岡清男らとの活発な交流が始まりました。

橋本が共鳴した教科研とは、教育を観念的なものでなく、客観的・実証的に捉えようと城戸らを中心に結成されたグループで、1939年には全国に先駆けて教科研南多摩支部が結成されます。橋本らは、農村地帯に残る複式授業（1つの教室

で複数の学年を教える授業方法）の撤廃を働きかけたり、農村図書館運動にかかわったりしました。恩方村の小学校での農村図書館運動を描いた文化映画「村の学校図書館」（1941年公開）には、橋本も町の本屋さんとして出演しています。

橋本は教科研の枠にとらわれず、さらに活動の幅を広げようと、1940年に多摩郷

▶八王子に迎えた教科研一行（後列左端が橋本）



土研究会を結成。複式授業解消運動を展開したり、市川房枝ら婦人運動の先駆者と元八王子村の女性たちとを交流させる活動をしたりしたほか、学者や文化人を招いての座談会や見学会を開催していきま

した。なかでも、由木村で展開した無医村解消運動はマスコミにも紹介され、全国に波及しました。村には医学部学生ら

▶文化映画「村の学校図書館」に出演



▶移転した揺籃社にて



が訪れて集団診療がなされ、文部大臣が視察に訪れるなど、一定の成果を収めたものの、残念ながら戦争の影響で中途なものとなってしまいました。

戦争と向き合う

太平洋戦争が始まると、非戦論者だった橋本も「敗戦となれば人民が惨苦を負担しなければならぬ」と、陸海軍に寄付するなど約1年間は戦争協力をしています。しかし、その後は敗戦を予測し、早期終結によって戦争被害を少なくするべきと考えるに至り、改めて非戦論者に戻りました。

敗戦前年のある日、小学4年生だった息子の鋼二と散歩をしていた橋本義夫は、次のように語りかけました。

「お前に言っておく、戦争は負ける。きつと負ける」

驚いた鋼二少年が「何とかならないのか」と問いかけると、

「上手に負けて、その後みんな頑張ればいいのだよ」と言われたそうです。

その年の12月、橋本は治安維持法違反で検挙されています。特高警察は揺籃社の店内や自宅まで家宅搜索をし、書籍や手帳、日記などを

夢、実現されなければならぬ夢

青年諸君、老壮年のきたならしい夢を、すっかりかなぐり捨てて、よく消毒しよう。

青年諸君、

夢みろ、

夢みろ、

夢のないところに、復興はないんだよ。

日本の村にも町にも

世界中の人が住み

世界中の国々に

日本人が住み

そこで働き

その土地のためになり

世界のためになり

みんなそこで葬られてゆくようになればいい。

一九四六、二、一一

(日記より抜粋)

大量に押収しました。そして

橋本は牛込区(現新宿区)の

早稲田署に連行され、約5か月もの間、監禁されてしまいます。

ます。

八王子に戻ったのも束の間、1945年8月の八王子

空襲によって経営する揺籃社

だけでなく、蔵書を避難させ

ておいた生家までもが全焼してしまいました。生活の基盤

だけでなく、自身の思想の核

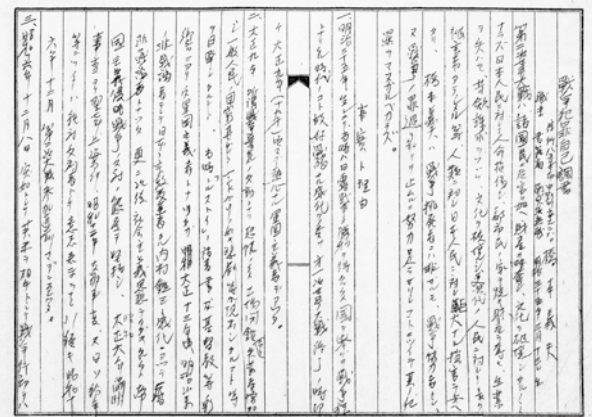
となった書籍まで失ったこと

に、橋本がどれほどの喪失感を抱いたか、想像に難くありません。

ません。

敗戦後、橋本は日本を復興させるにはどうしたらよいの

戦争犯罪自己調査



かと模索し、「我が主張」や「何を清掃すべきか」「夢、実現されなければならぬ夢」と題した提言などをいくつも書き残しました。また、国内の戦争責任の追及が不十分なことを憂いて、1946年2月に「戦争犯罪自己調査」を記し、自らの戦争責任まで明らかにしています。

地方文化研究会

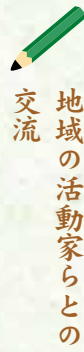
そして橋本は、「文化不毛の地」八王子に「文化的緑化計画」を実現しようと運動を

開始します。1951年には、自宅玄関先に「地方文化研究会」という小さな看板を掲げ、活動を始めました。

この会で具体的に展開したのは、建碑活動をはじめ、丘陵開発運動や博物館建設運動、地方史研究と「地方文化資料」などの出版、地方紙への投稿などです。こうした取り組みはいずれも、地方の人びとのために尽くしながら埋もれてしまっている地域の偉人を顕彰し、その志を広く伝えるためであったり、多摩丘陵の自然を大切にしながら地域を開発していくために計画したものです。そのために建てられた石碑は6年間に約15基(P88-9参照)、作成された地方文化資料は13年間に60冊以上という数にのぼります。

さらに橋本は、15年間に約2290編という地方紙(商工日新聞など)への投稿もしています。投稿の際には本名だけでなく、多摩丘人、中野吾作、菜梨言平等といった約70ものペンネームを使い分け、最も多い1963年に

は、274編もの投稿文が掲載されました。この時期に何でも書いてためしてみた経験が、後にみんなに文章を書かしたいという思い、そして「ふだん記運動」(P6〜7参照)につながっていきます。



敗戦後に始めた橋本義夫の活動の多くは周囲の賛同を得られませんでした、次第に

彼の文化運動を支援する人も現れました。

たとえば八王子振興信用組合理事の鈴木龍二は「多摩文化研究会」を主宰し、橋本をはじめとした地域の郷土史家に季刊誌『多摩文化』という研究発表の場を提供しました。会には沼謙吉や桐國男ら若手研究者が加わり、やがて橋本とともに活動するようになります。

また、橋本が『歴史評論』に「困民党」についての論考

を掲載したことから、多摩における困民党事件の概要が全国に知れ渡るようになりました。そこで知己を得た1人に新進気鋭の歴史家、色川大吉がいます。色川は1964年、民衆思想史の草分けとなった『明治精神史』を上梓し、1966年に八王子に移り住んでからは橋本らとともに積極的に多摩地域の社会運動にも参加しました。

1974年、色川は『中央公論』誌上に「現代の常民——橋本義夫論」を発表します。これを元に刊行した『ある昭和史——自分史の試み』(中央公論社)という本で「自分史」を造語し、橋本義夫の半生を紹介しています。これはふだん記運動とともに、全国に橋本義夫の名が知られる大きな契機となりました。



▶ 自転車で走り回っていた橋本



▲「多摩文化」に参加していた方々
(3列目中央が橋本、その左が色川大吉)

◎参考文献

橋本鋼二『万人に文を』(揺籃社)

橋本義夫『沙漠に樹を』(揺籃社)

橋本義夫『暴風雨の中で』(ふだん記旭川グループ)

橋本義夫は1968年に創刊した「ふだんぎ」によって、全国に広く知られる存在になりました。また、1970年代後半からは高度工業社会のもたらす暗部に目を向け、新しい価値観を持つ文化の創造を期待して「新人類文化」という考え方を提唱し、ふだん記運動の成功をもとに、より良い社会の在り方を模索しました。

その取り組みは1985年8月4日に永眠するまで、精力的に続いたのです。彼は「文化不毛の地」と感じた八王子にあって、さまざまな苦難に見舞われながらも生涯にわたって理想社会の実現に向けて信念を持ち、活動が続けていきました。

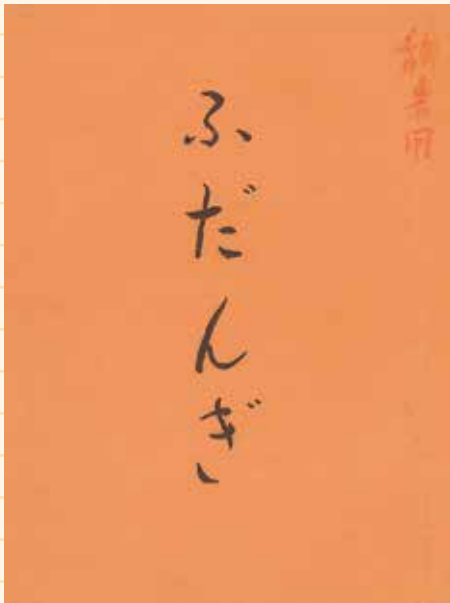
後に橋本は自身の活動のことを、「禿山に木を植える男」という詩に表しています。たしかに彼が目指したものは理想的に過ぎる部分もあったかもしれませんが、これからの八王子の文化のあり方を考えるときに、橋本義夫が植えた木は多くの実りを私たち市民に与えてくれることでしょう。

創刊

1950年代、地方紙への投稿を重ねてきた橋本義夫は、より多くの庶民が文章を書き、発表できるように場を模索するようになりまし。そこで、こうした趣旨に賛同した知人の主婦数人とともに、1958年に「ふだんぎ」の会を結成し、回覧ノートを作成します。

10年経った1967年11月には、彼女たちの書いた身辺雑記をまとめて『多摩婦人文集』を刊行し、執筆者や市内の文化人などに声をかけて出版記念会を開催しました。その席

上で、「誰か謄写版でいいからみんなの文集を作ってみませんか」という橋本の誘いに、すぐに手を挙げたのが主婦の四宮さつきでした。早速作業に取り掛かり、翌年1月にはガリ版刷り35ページ、15人が執筆した冊子「ふだんぎ」が創刊されました。産声をあげたのは、地域文化運動に積極的にかかわっていた追分郵便局長、大野聖二の自宅の一室。大野聖二・弘子夫妻や四宮さつきらが手作りで印刷した50部の冊子の表紙には、号数も記載されています。記念すべき創刊号が仕上がったとき、大野弘子は、「今に、これを博物館に並ぶようにしてみせます」という橋本の力強いことを耳にしました。



▲「ふだんぎ」創刊号の表紙

義夫の短言

探っていくのは興味があるが、強制的に教えられるのは面白くない。

飛躍

創刊して2か月後には早速2号が発行され、その後号数を重ねるごとに投稿者、発行部数が増えていきました。1970年12月発行の17号になると、100ページを超えています。

そんな折、橋本は散田町で創業したばかりの印刷会社、清水工房を訪れます。創業者の清水英雄は、4畳半の工房を訪れるなり、「狭けりや、なお結構」と語る橋本の姿を鮮明に覚えていて、「人を上下関係で見ることなく、同一線上に身を置いていく人だ」と直感しました。このとき、橋本が清水工房に置いていたのは、ふだん記の指南書『ふだん記について』の原稿です。清水工房にとって、この本が初めての書籍の仕事でした。1971年に「ふだんぎ」18号がタイプ印刷となってからは、毎号の「ふだんぎ」誌の印刷も担うようになります。

投稿者やページ数も増え、現在も脈々と続いている「ふだんぎ」ですが、定期的に刊行される冊子へ各々が文章を投稿するという基本のスタイルはいまも変わっていません。こうして書いた文章が積み重なると、やがて1冊の個人本（自分史）となっていくことも橋本は想定していました。

「ふだんぎ」誌に書きためたものをまとめて、鳶職の尾股惣司が1972年に著した『ある鳶職の記録』は、江戸っ子の暮らしを瑞々しい筆致で描いた1冊です。後に大手出版社でも刊行されたこの本を、落語家の柳家小三治がNHKラジオ「私の本棚」で朗読したこともありまし。



▲尾股惣司著『ある鳶職の記録』

橋本義夫の

橋本義夫は数々の社会運動を起こしてきましたが、なかでも1968年に創始した「ふだん記」という文章記録運動は、八王子にとどまらず全国に展開し、最も世に知られる

ふだん記運動

思想

ところで、橋本はなぜふだん記という文章記録運動を始めるに至ったのでしょうか。

その理由の1つに歴史への意識が挙げられます。「文を書く」ということは、かつては特権階級のものである、一部の人間の記録しか残りませんでした。橋本は万人が書き、その記録が残ることによって庶民の生活が歴史になり得ると考えたのです。

とはいえ、いままで文章など書いたこともない人に「文を書け」といっても無理な話です。そんな抵抗感から解放する役割を果たしたのが「下手に書きなさい」ということです。

でした。名文や美文を手本とせず、自分のことばでありのままの日常を書く。橋本はこれを繰り返すことで、誰もが文を書きやすくなるのではないかと考えました。

また、大野弘子が「文章や手紙を書くたびに、橋本義夫さんや四宮さつきさんから鉄砲玉のように返事がきて、大変だったけれど楽しかった」と振り返るように、ハガキや手紙での自由な交流が盛んでした。こうした仲間のことをふだん記では「文友」と呼び、大切にしています。橋本の考え方は、1978年に刊行された講談社現代新書『だれもが書ける文章——「自分史」のすすめ』などにまとめられたほか、歴史家色川大吉の書籍やTV、新聞などのマスコミにも紹介され、市内にとどまらず全国に伝播していきました。



▲橋本義夫著
『だれもが書ける文章』
(講談社現代新書)

義夫の短言

何ごとでも経験である。研究材料にすればマイナスはない。

20×20

各地

橋本義夫は「その土地よかれ、その人よかれ」と、自分たちの住む各地でふだん記グループをつくるよう勧めます。この考え方に呼応して、現在も全国（東京）・関西（大阪）・春日部・さいはて（北見）・あいち・北九州・四条畷（大阪）・津軽・旭川・静岡・みちのく（仙台）・札幌・江別・高知・留萌・雲の碑（八王子）・帯広の17グループが活動し、交流を続けています。

ふだん記運動発祥の地、八王子でも「ふだん記 雲の碑」グループが活動しています。「雲の碑」グループでは、年2回（6月・12月）機関誌『ふだん記 雲の碑』を刊行しているほか、毎年4月の第3日曜日に「雲の碑の集い」という文友同士との交流会を行っています。

現代はメールやSNSなど、人と人との新しいつながり方がいくつもありますが、ふだん記ではいまでも多くの「文友」が手紙やハガキで交流しながら、機関誌に投稿を続けてい

活動となりました。ここでは八王子発祥の文章グループ「ふだん記」の活動を紹介します。

●「ふだん記 雲の碑」グループ
北野台2-13-6 橋本緑方
☎・FAX (636) 84222



▲「ふだん記 雲の碑」の集いにて（2018年4月）

義夫の短言

大きいものはそれだけ。小さいものは伸びる可能性がある。つとめて小さいものを伸ばそう。

ます。ふだん記のモットーは「新人優先」。何はともあれ「普段着」でおしゃべりするつもりで、身近なことや思い出などの人生体験をあなたも書いてみてはいかがでしょう。

20×20

1950年代、橋本義夫は市内に十数基の石碑を建てようと企画・立案し、尽力していました。いまでこそ著名な存在となったものもありますが、建立当時は賛同者も少なく、苦難の連続であったといえます。ここでは、八王子にとって、そして橋本にとって特に大きな意味を持つ8つの石碑をご紹介します。

橋本義夫の 建碑活動

橋本義夫の建碑マップ



① 偉農河合宗兵衛頌徳碑



〈川口町 川口川北側沿い・1952年10月建立〉

耐寒性、品質ともに優れた裸麦の新品種「宗兵衛裸」を作った河井宗兵衛（1852～1910）は、長期にわたり裸麦の優れた品種を育成したほか、研究実践をもとに新栽培法を考案した。

② 国民党首領 塩野倉之助碑



〈犬目町 安養寺・1954年4月建立〉

塩野家は代々名主を務めた豪農。塩野倉之助（1824～1907）は貧しい地方の農民のため立ち上がったが、逮捕され、家も没落した。幼少期に困窮裏面で耳にしていた塩野の義拳を評価して建碑。

③ 万葉歌碑



〈散田町 万葉公園・1954年5月建立〉

八王子市との合併で消えゆく南多摩郡横山村の名を、万葉集の「赤駒を山野に放し捕りかて多摩の横山かしゆかやらむ」で残そうと建碑。碑の周囲を「万葉公園」とし、万葉祭を開くなどの企画も。

④ 図書塚



〈諏訪町 図書塚公園・1954年11月建立〉

元八王子村にて小学校教育、青年教育に従事した平井鉄太郎（1871～1951）の顕彰碑。平井は私財の多くを投じて良書を集め、青少年の図書館を作ろうとしたが、八王子空襲で灰燼に帰した。

⑤ 絹の道碑



橋本は、幕末から明治にかけて生糸の運搬に重要な役割を担った鍵水の「横浜街道（浜街道）」を研究し、「絹の道」と命名。碑を建てれば「日本蚕糸業史跡」となり、丘陵地の観光に資すると考えた。

〈鍵水 大塚山公園・1957年5月建立〉

⑥ 造化の碑



明治の文人、北村透谷は一時滞在了上川口村を「希望の故郷、幻境」と呼んだ。橋本の「幻境の碑」建立は地元で反対され、他所でもクレームがつき、北村の『内部生命論』の一節に変更して碑を建てた。

〈みつい台 谷野西公園・1957年10月建立〉

⑦ 近代先覚者讃碑



封建社会から続く差別と闘い、明治に近代化への道を拓いた山上卓樹、奥田兵助、青木松兵衛、柏木豊次郎、山口重兵衛、宮崎豊吉、武藤間次郎、山上卓三の8人を讃えた。旧柏木豊次郎邸跡に建碑。

〈泉町 泉町会館・1957年11月建立〉

⑧ コックス碑



〈鍵水 多摩養育園・1957年12月建立〉

大正・昭和期に近代日本の英語教育に貢献した父ウィリアム、息子のポール、ヘンリーのコックス親子3人を顕彰。ポールは1917年から浅川町に住んでいたが、1945年に強制送還途上で死去。